例会記事

六月例会　昭和六十三年六月二十五日（土）
順天堂大学医学部九号館一番教室

一　法隆寺『医薬古抄』と『医心方』　槇　佐知子
二　明治より第二次大戦までの女子医学留学生　三崎　裕子

七月例会　昭和六十三年七月二十三日（土）
順天堂大学医学部九号館一番教室

一　解剖図に関する一考察　布施　英利
二　朝鮮通信使との医事問答　吉田　忠

九月例会　昭和六十三年九月二十四日（土）

一　『米利堅平本常用方』について　高安　伸子
二　『扶氏経験遺訓』における〝麻酔〟　酒井　シヅ
三　ビデオ鑑賞―高木兼寛の生涯―　中村　昭

例会抄録

解剖図に関する一考察
―『カウパー解剖図』から『解剖存真図』への変容を手掛りにして―

布施　英利

西洋の解剖図の傑作『ビドロー解剖図』（一六八五年。『カウパー解剖図』は一七三九年）は、その形態描写は輪郭線なしの陰影のみの技法でされている。ところが、これを原画にして描かれた江戸の『解体新書・付図』（一七七四年）は、陰影の描写がなくなり、逆に輪郭線のみで描かれている。これをたんなる描き方の違いとせず、ヨーロッパと日本との「物の見方」の違いと捉える。つまり画像の違いは視知覚形式の変容である。さらに、その『解体新書・付図』を原画として模写をした『解剖存真図』（一八一九年）は「ありのままの色彩」が重視されている。ここに再び視知覚形式の変容がみられる。

つまり、同じ物を見てもそこには「複数の見方」があり得る。それは「複数の描き方」として表われる。これを「過去の問題」として片付けてはならない。「見ること」を基礎とする解剖学にとっては、これからも考え続けなければならない問題である。

（東京芸術大学・美術解剖学研究室）